朝日 歌壇 俳壇

第41回 朝日俳壇賞

2024年の入選句から、4人の選者が1句ずつ選びました。受賞者には、賞状と記念品が贈られます。

高山れおな 選

野遊のことろことろや日のとろろ　（高松市）渡部　全子

〈評〉春日遲々の気分をかきたてるリフレイン。甘く、気怠く、ちょっと不吉で。

暖かな春の野に、子どもたちが楽しく遊んでいます。こんな平和に、ふと鬼の気配がないかと不安がよぎります。「ことろことろどのことろ」。でもそんな不安も穏やかな日差しにたわいなく消えてゆくのです。

小林貴子 選

鴨鍋や仕留める迄を聞かざるる　（千葉市）桐畑　佳永

〈評〉鴨を仕留めるまでの話はなまなましい。食べること、生きることを思う。

鴨肉とネギの鍋が煮立っており、よい匂いがしている。客が次々と鴨を仕留めるまでを質問するので、招待者はつい長々と話をしている。こちらは涎が長々と垂れ困っている。そんな滑稽なシーンを思い出して作った。

長谷川櫂 選

腸を晒すアメリカ秋黴雨　（東京都足立区）三角　逸郎

〈評〉時事問題は新聞俳壇の大事な題材。昨年最大の珍事を鋭く詩的に描く。

自分第一の考えが世界を席巻しています。世の中はどうなっていくのでしょうか？　剝きだしの本音が世界を破滅させないことを切に願います。四人の孫たちの人生が平和の光に照らされますように。祈りの一句です。

大串章 選

極楽も地獄も忘れ日向ぼこ　（長崎市）下道　信雄

〈評〉無念無想の日向ぼこ、無我の境地にひたる。喧噪を離れた至福のいっとき。

ふり返れば、私の一生は極楽と地獄の間をうろうろしていただけのように思う。最近、極楽も地獄も霞んで遠くになった。そのせいか、何処かが軽くなったような気がする。その心境が、この句を生んだのかとも思う。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（週に3作品まで）。QRコードから

高野公彦 選

便利だがSNSは人間に神が与えた「トロイの木馬」　（横浜市）島巡　陽一

物価高毛染めもやめる決心す山姥われに白髪良しとす　（飯田市）草田　礼子

便利なる本の宅配知りをれどけふも書店の棚から選ぶ　（東京都）上田　国博

本屋には行かずネットで買う人は黒だけで絵を描いてる人か　（市原市）笠原　英子

ふるさとの能登を憂える美容師の洗髪の指に力がこもる　（松戸市）遠山　絢子

裏庭で立ち食いの栗鼠と眼が合えば餌を差し出して分け合う仕草　（アメリカ）大竹　博

「好きだけど住みたくはない」と自が国を言わねばならぬシリアの子供（観音寺市）篠原　俊則

鴨と鵜の並ぶ川辺の道ゆけば熊鈴の音に一斉に翔ぶ　（長井市）大竹紀美恵

惚け顔をしていますよと娘言う　三十一文字を思案中です　（茅ケ崎市）若林　祐光

悪人は多分いないが物事を斜めから観る歌人は多し　（横浜市）毛涯　明子

【評】1首目、SNSは便利だが弊害も生み、これは神が人間界に送り込んだ刺客だ、と。2首目、ユーモアを交えて物価高対策をうたう。10首目、12月22日付の本欄に載った岩部博道さんの作「歌人に悪人なし」説に寄せて、と注記あり。

永田和宏 選

笑ってるとはかぎらないにんげんは笑顔のままで泣ける生きもの　（上尾市）関根　裕治

あんなにも身を固くして「あ」と言ひて最期のことばのあとのしづけさ（生駒市）辻岡　瑛雄

三本立て観終えて意気がる学生街おれもおまえも健さんだった　（西条市）村上　敏之

スピーチの猛特訓を受けたのは夜の八時の鴨川デルタ　（守谷市）久保田洋二

うす暗き洞窟のような喫茶店老人らの声ジャズに溶けゆく　（松戸市）遠山　絢子

ダットサンでデコボコ道をガタゴトと走りし若き日はるかに遠く　（三鷹市）山縣　駿介

カラオケで笛吹童子紅孔雀歌う人あり「仲間」と思う　（船橋市）押田久美子

海荒れて寒鰤船を舫ひたる港は雪に埋もれゆくかも　（横浜市）白川　修

ボルシチを作りソ連を懐かしむモスクワの友ドネツクの友　（旭川市）齊藤　洋子

打ち切りを宣言せむもおほげさに思へて今年も賀状書きをり　（岡山市）梶谷　基一

【評】関根さん、箴言的な一首。作者にもそんな経験があった筈。辻岡さん、最後の言葉は「ありがとう」だったのだろう。そう言って死ねるのは幸せ。三から七首まで昔を懐かしむ。映画の後はみんな高倉健らしく無口になって帰ったものだ。

馬場あき子 選

名を呼べば愛犬ムサシは尾を振れり口髭白く十八歳なり　（豊田市）近藤　敬二

標的は我だったのかいにしへの息子の部屋のげんこつの穴　（大阪府）尾子　靖江

耕耘機を降り来し農夫にこやかに「グーテンターク」と手を振り来たる　（ドイツ）ハルツォーク洋子

蟷螂の身体に入りしハリガネムシ迷はず池に入りて跪けり　（香取市）川崎　寛美

原発の危うき避難計画路崩れたままの震災の崖　（石川県）瀧上　裕幸

日暮れても寒さしのぎてボール蹴る裸足のままのガザの子供ら　（中津市）瀬口　美子

ランドセル鏡にうつしポーズとる春を待てない幼がひとり　（厚木市）北村　純一

マーケットの惣菜売り場の日暮れ時値下げシールの貼らるるを待つ　（横浜市）安達三津子

松枯れが少し下火になりし山　何処も彼処も猪の畑　（可児市）田上　勇嗣

白妙の雪の浅間を遠く見て下仁田葱をひとり掘りいつ　（前橋市）荻原　葉月

【評】第一首はその名のムサシから大型犬が想像されるがもう十八歳。「口髭白く」も威容とは言えないかも。しかしそれだけにいっそう愛しいのだ。かすかに尾を振るのさえ。第二首は息子の部屋の爆発的なげんこつ痕。母の思いは複雑。

佐佐木幸綱 選

見上げれば白鳥の鉤の幾重にも並び重なり夕空を急ぐ　（盛岡市）渡辺　恭

メールではこうはいかない半世紀前の手紙の束が出てくる　（出雲市）塩田　直也

民宿の甲斐犬が猿に襲われし噂にひと日暮れる山里　（静岡市）木村　徳幸

四たび読むモンテーニュなれ初めての出会ひのごとき文にまた会ふ　（鴻巣市）松橋　雅実

裏面が白紙のチラシ探してたころの商店街の賑わい　（東京都）富見井高志

点々と庭にもあったけもの道新雪の朝教えてくれる　（札幌市）佐川　圭子

塩焼きのさんま一尾をつつき合い三人で飲む酒の気安さ　（横浜市）黒坂　明也

書棚より高橋和巳かたづけるグッバイ青春よろしく玄冬　（東京都）青木　公正

いつの間にか街の喧騒消え去ってカーテン越しに分かる大雪　（南魚沼市）木村　圭

ほそりゆくふるさと思う統合に母校の名消え変わりゆくとき　（仙台市）沼沢　修

【評】第一首、「幾重にも」に注目。白鳥の群がいくつも重なりあうようにして飛んでいるのだ。第二首、手紙の時代が終わりかけているのか。メールではありえない場面をうたう。第三首、山里の全体を巻き込んだ今日の大ニュース。